

P3-52.**精神科病棟入院患者における転倒リスク要因の検討**

(社会人大学院博士課程3年精神医学)

○大野浩太郎

(精神医学)

高江洲義和、瀧田 千歌、井上 猛

(精神医学、東武中央病院)

志村 哲祥

【目的】 精神科入院患者における転倒は、精神症状や使用薬剤により頻度が高いことが報告されているが、使用薬剤の関連も含めた詳細な研究報告は少ないのが現状である。そのため我々は精神科病棟患者における転倒リスク要因を抗精神病薬やベンゾジアゼピン系薬剤との関連も含め検討した。

【対象】 平成22年4月～平成25年12月の間に東京医科大学病院メンタルヘルス科病棟に入院した578名のうち74名の転倒群と、非転倒患者504名の対照群を比較検討した。診療録を用いて転倒状況、患者背景、精神科診断名、隔離・拘束の有無、入院時のGAFスコア、抗精神病薬CP換算量、ベンゾジアゼピン系薬剤のジアゼパム換算量、抗うつ薬、気分安定薬、抗パーキンソン薬の併用の有無について後方視的に調査を行った。本研究は東京医科大学の倫理審査委員会の承認を得て実施している。

【結果】 転倒群では対照群と比較して、高齢であり(57.5±19.3 vs 47.3±19.8, $p<0.01$)、在院日数が有意に長く(59.7±40.7 vs 33.1±34.4日, $p<0.01$)、最終学歴が大学卒業以上の割合が有意に高く(52% vs 25%, $p<0.01$)、転倒前の隔離拘束施行の割合が有意に高く(24% vs 10%, $p<0.01$)、ジアゼパム換算量が有意に多かった(19.7±17.7 vs 13.8±14.1, $p<0.05$)。性別、同居家族の有無、精神科診断名、婚姻歴、入院時のGAFスコア、抗精神病薬CP換算量、抗うつ薬、気分安定薬、抗パーキンソン薬併用の有無については2群間で有意差を認めなかった。

【考察】 本研究結果より、高齢であること、入院期間が長いこと、大卒以上であること、ベンゾジアゼピン高用量であること、隔離・拘束が実施されたことが転倒に関連する要因であることが示された。今後の転倒予防対策として、在院日数の短縮、隔離・拘束の最小限化、ベンゾジアゼピン系薬剤の最小限

投与へ取り組むことが重要であると考えられた。

P3-53.**関節リウマチ治療がリウマトイド因子および抗シトルリン化ペプチド抗体の抗体価に与える影響について**

(社会人大学院博士課程4年糖尿病・代謝・内分泌・リウマチ・膠原病内科学)

○關 雅之

(リウマチ・膠原病内科)

太原恒一郎、沢田 哲治

【目的】 関節リウマチ (rheumatoid arthritis, RA) は関節滑膜を病変の主座とする自己免疫疾患である。近年、RAの自己抗体としてRAに特異性の高い抗シトルリン化ペプチド抗体 (anti-citrullinated peptide antibody, ACPA) が注目されている。ACPAには抗CCP (cyclic citrullinated peptide) 抗体や抗MCV (mutated citrullinated vimentin) 抗体が含まれ、特に抗CCP抗体はリウマチ因子 (rheumatoid factor, RF) と同等の感度を有しつつ、RFより特異度に優れている。本研究ではRAの疾患活動性とRF、抗CCP抗体、抗MCV抗体の抗体価との関連について検討した。

【方法】 8例の活動性RA患者について、抗TNF α (tumor necrosis factor- α) 抗体製剤であるアダリムマブによる治療前後で血清を採取し、血清中のRF (IgA, IgM)、抗CCP抗体 (IgG)、抗MCV抗体 (IgG) をELISA (enzyme-linked immunosorbent assay) キット (ORGENTEC社) を用いて測定した。

【結果】 アダリムマブによる治療前後で疾患活動性の指標は低下した。自己抗体に関しては、アダリムマブ投与後にIgA-RFの抗体価は1.3%減少し、抗CCP抗体と抗MCV抗体の抗体価はそれぞれ6.5%減少、5.2%増加したが、いずれも統計学的に有意な変動ではなかった。一方IgM-RFはアダリムマブ投与後に統計学的な有意差をもって27.5%減少した ($p<0.01$)。

【結論】 IgM-RFはRAの疾患活動性を反映して変動した。一方、今回の検討ではIgA-RFやACPAである抗CCP抗体と抗MCV抗体では有意な変化は得られなかった。抗CCP抗体を含むACPAはRA診断に有用な血清学的検査法であるが、RAの疾患